平成 27 年 5 月
語り部：阿部　純子

紙芝居『ヒロシマの火』の実演
（原爆投下当日から、数日後にヒロシマの火を見つけ、それを福岡県星野村に持ち帰り、火を絶やさず守り続けてきた話）

・自分が生まれていなかった時にこんなにも悲惨な出来事が本当にあったのかと、とても悲しい気持ちになった。火をともし続けていることを初めて知った。
・原爆が落とされてから今までずっと火が灯されていることを知り驚いた。今の日本は平和な世の中だが、昔はこんなにも悲惨な事が有り、もっとどんなことがあったかを調べてみたい。
・原爆が落とされた様子を絵や音楽を通じで見せてもらったので、まるで当時の声が聞こえてくるようだった。自分が体験したら本当に恐ろしいことだと思った。
・戦争の事をほとんど知らなかったが、紙芝居を見て、原子爆弾はすごく怖い兵器で、ほんの１秒で町や人を消してしまうことがわかった。広島に落とされた日は日本人として忘れてはならないと思った。
・原爆は恐ろしいものだと改めて知った。広島の人々が亡くなったことによって、他の県や村の人達の心を傷つける悲しい出来事だと思った。
・今まで当たり前に生活していたことが一気に壊された悲しみは本当に大きいと思った。相手の気持ちを考えれば戦争は起きないと思うので、戦争が起きないように相手の気持ちを考えられる人になりたい。

Ｑ　戦争を体験したか？
Ａ　原爆が落ちた年の２月に中国で産まれた。戦争が終わった８月１５日に捕虜となって収容所に入れられた。アメリカの船で難民として帰って来られたのが翌年の３月２１日だった。後から周りの大人たちからきいた。
・原爆を２回も落とされた日本の悲しみをアメリカは知ることができないと思った。ただ、それくらいひどいことを日本もアメリカに対してしていたのだと思う。